ふれあい情報

2023 年 3 月 15 日（水）　第 362 号

■発　行　日本退職者連合
■発行人　野 田 那 智 子
■連絡先　〒101-0062
東京都千代田区神田駿河台 3-2-11
＜TEL＞ 03-5295-0507　＜FAX＞ 03-5295-0541　＜e-mail＞ ntr@sv.rengo-net.or.jp

ジェンダー平等推進のための第 11 回学習会を開催

人生百年時代の高齢者の暮らし
…ジェンダーの視点から

3月8日は国際女性デーです。退職者連合は福祉学者の春日キスヨさんをお迎えし、「人生百年時代の高齢者の暮らし～ジェンダーの視点から」というテーマで講演いただきました。

誰かの世話にならなきゃ人は死ねません

私は社会学者です。現場に出向いて、支援者、家族の声をひたすら聞き、今の日本で何が起きているか、それを社会的事実として立ち上げるという作業をしてきました。

皆さんに４つ質問をします。

まず、自分は何歳まで生きると思いますか。イメージしてください。次が子どもの世話になりたくないと思いますか。これは、「なりたくない」が８割から９割です。では、なりたくない人は、誰の世話になるんですか。

その人たちの人生のイメージって何でしょう。「最後まで自己決定できる主体である俺、私」。認知症になったり、手術中で判断力を失ったりする俺、私はいない。

誰かの世話にならなきゃ人は死ねないんです。だけど、子どもの世話にはならない、と思う人が圧倒的に多い。で、「世話なる」と言ったとたんに、今度は丸投げになります。それは、「世話にならない」と考えているから、自分ができること、できないことの仕訳けができていないからです。

春日キスヨさん

福祉学者・社会学者
元京都精華大学、安田女子大学、松山大学教授。
「百まで生きる覚悟」など著書多数。

退職者連合の取り組みと課題

畠山幸子
ジェンダー平等委員会
事務局長

世界銀行の調査では、日本は賃金と労働分野における男女格差解消の法整備が OECD 諸国で最低です。労働組合、退職者も問われています。

退連は 20 年に推進計画を策定し「方針への明記」「参画率 30%」などを確認しました。今年は５か年計画の中間年ですが前進も見られます。女性差別撤廃条約選択議定書の批准もぜひ本気で進めたいと思います。

連合あいさつ

井上久美枝
総合政策推進局
総合局長

連合は昨日 10 年ぶりに請願行動をやりました。春闘要求は 3 日現在で 4.89%と、25 年ぶりの高水準になっています。15 日が集中回答日になっています。

ジェンダー平等に関しては、生理休暇の問題などまだ十分には要求化されていません。組合に女性役員が少ないことが影響しています。連合はジェンダー平等推進計画フェーズ１に取り組んでいます。

主催者あいさつ

森嶋正治
ジェンダー平等委員会
委員長

一昨年、退連は「次世代に継承すべき社会」というプロジェクトを組み、「公正で多様性を認め合う社会」「差別も不条理もない社会」などを目指すとしました。この中の大きな要素がジェンダー平等です。各組織で方針化することも確認されています。

女性の進出は、政治、社会を変える上で必須です。具体的な目標を持って進んでいきたいと思います。

今のうちにヨタヘロ期の暮らしを考えよう
ピンピンコロリでは死ねません

食事は誰が作るのか

男性に聞きたいです。妻に何歳まで食事を作ってほしいですか。答え、「死ぬまで」（笑）。70で死ぬならまだいいですよ。私が聞き取りをしたご夫婦は、夫が96歳、妻が93歳。腰を痛めた妻がやっとほうれん草のお浸しを作る。魚を焼いて食卓に持っていく。さあ食べようと座ったら、96歳の夫がすでにほうれん草は全部食べていた。「情けなくて情けなくて・・」と。そういうご夫婦、けっこう多いわけですね。

ここに来られた男性の方、明日から週二日料理をしましょう。95まで妻だけに食事を作らせる人生をやめましょう。それがジェンダー平等というものです。自分の私生活もジェンダー平等に組み替えましょう。

70代までに情報収集を！

「おひとり様カフェ」「高齢社会をよくする女性の会」などをやって高齢者を見ていると、70までは「今は遊ばなきゃ。旅行も山歩きもしたい、美味しいものを食べたい」というような形で、まだ早い、考えたくない方が多い。

でも、必要になった時に誰の世話を受けるか。70代前半くらいにはいろんな情報を集めておいた方がいいと思います。何故か。自宅で暮らし続けることを決めるためにも、「施設ってあんなものか」と知るためにも、足腰が強くなければいけません。

「オプション料金」って小さい活字で書いてあるパンフレットを読み取る力がないともう駄目です。80過ぎてパンフレットを読んでると、後ろの方まで行くと前に何が書いてあったか忘れてしまう。施設見学に行けって言われるけど、免許証返上したから行けん。パソコンで検索しても、肝心なことは書いてない。どうにもならん、もうええわ。そうなります。

だから、そういう力があるうちに、自分はあの世に行くまでどう暮らしていくか、それを一人一人が考えなくてはいけない。どんなにピンピンコロリで死にたいと思っても死ねません。死ねる方は2割弱です。あとの8割は、やはりヨタヘロの時期があるわけです。

友だちがあてになるのは75歳までです

女性、特にシングルで生きてきた人は、「友だち、友だち」って言います。でも、友だちがあてになるのは75歳までです。

高齢者と言っても、65から75までの人と、75以上では、人間関係の質が非常に違います。いざという時の支援関係、「倒れた時の食事の世話を誰がしてくれるか」というのを調べると75歳以上の友達は役に立たんのです。

まあ、歩いて15分圏内ぐらいなら友だち同士の助け合いが可能ですが、交友関係が広くて、車や電車で行くような友達が親友というような場合だと、いざという時には役に立たない。友だちも、同じように老いている。

だから、シングルで生きる方は今からでも遅くないから20くらい下の友人をまだ元気なうちに確保する。（笑）

「子どもの世話にならない」は、はっきり変わる

「子どもの世話にならない」と言っていた人が75歳以上になるとどうなるか。

娘がいる人はまず娘に頼る。いない場合には息子。頼りたくなかった息子の奥さんが最後に来る、という形で、はっきり変わってきます。

そういう時に、先ほど「頼らない」と言った方は何と言って頼みますか。「若気の至りで頼らないと言ったけれども、こうなってみたら頼らなきゃどうにもならんなあ。お願いします」って言えますかねえ。特に男性。

この間講演の後に男性と話していたら、「じゃあ今度帰ってきたときに、息子二人に言っておこう」と言われるんです。「何て言うんですか」って聞いたら「あんたらはワシをどうするんか」と。（笑）

つまり、お願いの仕方も知らんのですね。そりゃあないでしょう。そしたら息子さんは言いますよ。「あんたはどうしたいんね」って。

地域の集まりでしたから、そういう時は『わしがもし倒れた時には、集まりに行って、保健師さんやケアマネさんに、一番いい選択肢はどんなことですかと尋ねてほしい』と答えるのが一番いいんじゃないですか、とお話しました。つまり、自分の意向を持つことです。

講演する春日先生　　連合会館2階大会議室

百まで生きることに備える

最後まで自宅で暮らすのは認知症だと非常に困難

最近「最後まで一人暮らしができる」と言われます。これはガンなんかだと可能で実際に増えていますが、認知症でできるケースは少ないです。家族以外の支え手がないと非常に難しい。

認知症でも要支援2ぐらいだとヘルパーさんの回数が少ないわけです。で、夏すごく暑いときにクーラーのリモコンをどこに置いたか分からない。自宅で暮らすということは、リモコンの管理ができるとか、お薬がきちっと飲めるということです。

非正規雇用の推進が家族力の低下を招いた

日本の社会はあまりにも急激に人口学的な変化を起こし、長寿化が進みました。そしてあっという間に家族力が低下しました。

背景には労働政策の問題があります。小泉以降、非正規雇用を推し進め、結婚したくてもできないというような若い層が大量に出る社会にしてしまいました。

一方皆さんの世代は、高度経済成長期で栄養もいい。医療水準も高度化して死ぬかと思ったら死ななかった。そういう形で長寿化が進み、90歳以上まで生きる女性は、30年前4人に一人だったのが、今は過半数になりました。

寿命観を変えてください

先ほどご自分は何歳まで生きるつもりかを伺いましたが、何歳くらいを想定されましたか。85歳くらい、という方が多いんですが、それは親の世代の寿命観です。今日は何も覚えなくていいから、寿命観を変えてください。

女性の場合、皆さんは95までは生きます。今、死亡者数が最も多い年齢は女性は93歳、男性は88歳です。

ということは、それを超えて百歳の人も年々増える。最初は金杯を配ってたけど、予算が追い付かない、ということになりました。百まで生きると人はヨロヨロになります。かけっこできません。どんなに元気でも百の人の元気は、「それなりの元気」です。見守りが要ります。

女性は長寿期を一人で生きることになる

今の75歳以上世帯は、一人暮らしが大変に増加し、次が老夫婦です。明治、大正のように跡を継いだ息子家族といっしょに暮らす高齢者は1割もいません。

長生きはするわ支える家族はいないわ、なのです。

その直撃を受けるのは女性です。男性より長生きするからです。85歳以上の女性は一人暮らしが四分の一、施設が四分の一で、これで過半数です。

サ高住はオプション料金が

サ高住はピンキリです。サ高住、サービス付き高齢者住宅ですが、「見守りと情報提供」の2つがサービスで、他に色々してもらうと、オプション料金が必要になります。

例えばぎっくり腰になって、トイレにもよう行かん、食事も運んでもらわなくては、となると、「おしっこは身体介護で10分1100円です」って言われるわけです。介護保険を使えば1割負担ですが、サ高住ではそんな風にお金がけっこうかかります。もう払えないから、ということで途中で出ていく人がけっこうおられます。

在宅で暮らす…病気の時に誰が食事を？

では、在宅だとどうか。

男性は呑気です。何故かというと、妻がいるから。男性は85歳以上でも半分近くは妻がいます。一方、女性の場合、80歳で「配偶者無し」が51.3%。高齢になるほど夫がいなくなり、95歳くらいまで生きなきゃいけない。

金さえあれば何とかなるかというと、なりません。

「高齢社会をよくする会」で調査をしたら、病気の時に食事を作ってくれる人がいないというのが、単身世帯では半数でした。会員は、どちらかというとシングルでも関係を作ってきた人たちです。にもかかわらず、頼る人がいない人がけっこう多い。

「家族」と「労働市場」からの二重の排除過程が進んだ

若年、高齢者を問わず、90年代以降家族によるケアと保護を女性たちは急速に失ってきました。コロナ禍で食う物も食えないというような困窮状態に陥ったのは、高齢女性と非正規雇用のシングルマザーでした。

かつては、非常に女性差別的だけれども「家にありては父に、嫁しては夫に、夫亡き後は息子に」という形で、家父長的な形で家族に包摂されていた女性たちが、90年代以降はじき出されました。

高齢女性は専業主婦でしたから夫亡き後は低年金になる。高齢女性は専業主婦時代という形で排除され、若年のシングルマザーたちは非正規雇用労働という形で排除される。「家族」と「労働市場」からの二重の排除過程が進みました。にもかかわらず制度としては性別役割分業の、高度経済成長期の戦後家族のモデルのまんまです。

自立というのは依存先の選択肢が多いこと

まずはキーパーソンを決める

皆さんの世代くらいまでは多くの人が結婚して子供がいるわけです。それなら子どもを頼ればいいのに、と思うんですが。子どもの世話になりたくない。人の世話にはなりたくない、というのがすごく多いのがこの世代です。始末に負えないですね。（笑）

最低限、皆さんくらいの年齢になったら誰に決定してもらいたいか決めてください。子どもがいる方の場合には、自分が意思決定できない時に娘か息子か。つまり、キーパーソンになるのは誰か、それを相互に了解しあっておくことが大事です。

「どこで」「誰の」世話になるかを決める

どこで誰からの世話を受けたいのか、これも今のうちに決定してください。

何故か。変えていいんです。どんどん変わります。しかし、決めないと情報が入ってきません。在宅で、となれば、自分が住んでるところは24時間の巡回サービスあるか、要介護1でそれが何回受けられるのか、訪問診療はあるのかしら、というような様々な情報に敏感になります。

施設に入ろうと思ったら、施設見学も今からして、やっぱり施設は駄目だって思えば在宅に変えればいいんです。しかしとりあえず75を過ぎたら、決めて動く。子どもに丸投げするのはやめましょう。子どもがぐれます。

娘に頼るなら娘に多く相続するように

そして、娘を頼ろうと思っている方は、娘に財産を多く渡してください。娘の世話を受けながら息子が後継ぎだから息子に多くやるっていう男性高齢者、けっこう多いんです。

これは恩を仇で返すようなもんです。皆さんみたいにジェンダー平等というのを学ばれた方は、娘に面倒をかけたら、娘にそれ相応の相続をさせる。それが平等というもんです。

「自立」というのは依存先の多いことです

熊谷晋一郎さんという、当事者研究をしている東大のお医者さんが、こんな風に言っています。

「自立の反対語は依存だと思っているいる人が多いが、私たちは膨大な人やモノに広く、浅く依存して生きています。だから、依存しない状態が自立だというのは完全に間違いで、依存先の数が多いことが自立です。依存先の選択肢が多く、それぞれの依存度が浅いことが自立なんです」と。

だから、丸投げしないためには「自分の意向・のぞみ」を持って、できないことは人に支援を求める「受援力」、助けを求める力をどうつけるかが非常に大きな課題になります。

皆さんの運動が重要です

人類未踏の時代に老いを迎える私たち

こういうような問題をどうしてこの世代が考えられないか。人類未踏の時代で、あまりにも急速に社会が変わったために、家族観が追い付いていないんです。社会観も制度も追いついていないんです。そうした空白地帯に、私たちは老いを迎えており、これからさらにそれが厳しくなるわけです。

こういう状態はさらに進みます。シングル化もさらに進みます。雇用の不安定が単に子世代の問題ではなくて、高齢世代、全世代にいろんな生活苦をもたらしている。

だから皆さんの運動が、それだけ重要だと思います。若年の女性たちが、大卒でも非正規雇用者が5割を超えるというような状況です。若い世代の女性の雇用状況を、皆さんの運動で本当によくしていってほしいなあと思います。

わが身のこととして制度とジェンダーの問題に取り組もう

終活と老い支度は違います。今日お話ししたのは、老い支度をきちんとしましょう、という話です。

しかし、自分でやることには限りがあります。家族力が、個人の力がこれだけ弱った時代は、「制度」しかありません。

国は、恐ろしいことに要介護2までの事業を介護給付からはずし、地域支援事業に移すと言っています。要するに、地域のボランティアさんが担うということです。要介護2は認知症だったりしたら大変です。それから、窓口負担が2～3割になる。3万だったのがある日突然6万になったら、おー！！ってなるじゃないですか。室料も取られる。そういう形で改悪が進んでいます。そういうところでも、皆さん、わが身のこととして制度の問題、そしてジェンダー問題に取り組んでいただきたいと思います。

いっしょに頑張っていきましょう。